

特集

建築行為と環境をめぐる視点

02 「居住福祉」の諸相 (4) 混沌として居心地の良い空間 岡本 祥浩

04 主張 現実味を帯びる『国土の荒廃』～求められる専門家の行動 大槻 博司

24 構造設計の楽しみ (1) 「ラーメン構造」ってなんだ?! 松島 洋介

26 新建のひろば 東京支部——神宮外苑再開発の施工認可が出されたが、持続性のある社会づくりを全国的取り組みに 「ラーゲリより愛を込めて」父・山本幡男の強い信念を受け継いで「支配・収奪のない未来へ」——「世界文化再建」と私たちの役割山本厚生さんの講演

福田 啓次

06 「どうする新建」——くらしと環境の気付き

高本 直司 2050年脱炭素のために住まいづくりでできること

柳澤 泰博 合板、新建材、薬剤によらない自然素材でつくる家づくりで「長期優良住宅」を取る

伴 年晶 自然のモノづくりの手法に学び、破壊される人間性の復活を探る

31 私のまちの隠れた名建築 (15) 石上神宮 奈良県天理市 細井 健至

(表紙写真) 桜井 郁子

もっと早く重伝建に選定される歴史の価値があると思うが、気運の盛り上がり時間に時間を要した。24年前から毎年11月に行われる「霜月祭」では、古い町家が特別公開されている。最近、15年前に廃業した銭湯が再生され、古民家をリニューアルした宿泊施設、レストランが同時開業するなど、新たな動きがでてきた。御所市はこの動きをバネに1日も早く重伝建の選定を受けるべく、いま、準備を進めている。

(御所市議会議員)

「御所まち」を重要伝統的建造物群保存地区に 川本雅樹 「御所まち」は、関ヶ原の戦で功を成した桑山元春によって開かれた陣屋町が始まり。葛城川をはさんで西岸は商業が発達した西御所、東岸は浄土真宗の寺内町として発達した東御所。2つの町が形成され、江戸時代から明治、大正、昭和にかけての建物が今なお多く立ち並び、風情のある町並みを有している。奈良県では、橿原市今井町、宇陀市松山、五條市五條新町の3地区が重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)に選定されているが、「御所まち」もこれらに引けを取らない。 「背割り下水」と呼ばれた水路が今も使われ、集落の外から内部の様子が分からないようにした「遠見遮断」が残っている。寛保2(1742)年に検地を実施した時に作成された絵図が今でも使えるほど、町の形は変わっていない。

大槻博司

F.P.空間設計舎/全国常任幹事

新建憲章の前文に「建築とまちづくりにたずさわる私たちは、国土を荒廃から守り、かつ環境破壊を許さず」という、憲章が制定される前の綱領にも掲げられていた一節があります。1980年代半ばに新建に入会した私はこの「国土の荒廃」を具体的にイメージできなかつたし、さらに言えば少し大袈裟かなとさえ思っていました。

私が生まれてからでもベトナム戦争やソ連のアフガニスタン侵攻、湾岸戦争と、世界のどこかで戦争は続いていて、その国の国土は荒廃に見舞われていたのですが、どこか他所ごとの感覚がありました。しかし、2001年の同時多発テロとその報復戦争、現在のロシアによるウクライナ侵攻、そして日本の敵基地攻撃能力の保有に至って、完全に自分ごととして捉えざるを得なくなりました。

1986年のチェルノブイリ原発事故は大変なことになったと思いましたが、東海村の臨界事故は「まさか？」という感覚、そして福島原発事故で、まさかではなく原発は安全ではない、国土の荒廃かつ環境破壊をもたらすものと考えなければならなくなりました。さらに気候変動による大規模災害の頻発など、地球温暖化の問題は待ったなしのところまで来ています。

建築とまちづくりに直接かわる分野では、本誌昨年9月号と本年2月号でも特集したように、

明治神宮外苑の破壊的開発をはじめとして、全国で公共空間（コモン）が、成長戦略の名のもとに一部の企業の利潤追求のために市民から奪い取られています。2030年の冬季五輪招致を目指す札幌では「まちづくりを加速化させるきっかけとして」（公式HP）と、あからさまに招致目的が開発であることを打ち出して、すでに高層建築物などが大量に計画、建設されており、ジュールズ・ポイコフという米国の政治学者が言う「祝賀資本主義」を体現しています。

新東名、新名神など既存と並行する二つ目の高速道路建設、そして二つ目の新幹線であるリニア建設に至っては、荒廃にとどまらず崩壊につながる国土の破壊行為ではないでしょうか。自然の川を破壊して人工の川にすることなど到底受け入れられるものではありません。

人口減少が経済の縮小につながるのは必然であり「脱成長」社会の構築が課題であるにもかかわらず、無理やり数字上の成長を目掛けて、利潤を追求する企業活動を円滑にするための法制度の創設や改変が行われ、政治は国民の暮らしの豊かさとは反対方向に向かっていきます。高速道路や新幹線、超高層ビル、商業施設はその必要性の有無は斟酌されず、過剰であつてもつくること、開発することそのものが目的化しているため、常識的な

理屈が通じない異様な雰囲気蔓延しているのではないのでしょうか。

いよいよ国土の荒廃と環境破壊が現実味を帯びていると言わざるを得ません。今こそ建築とまちづくりにたずさわる私たちは、国土を荒廃から守り、環境破壊を阻止するために専門性を発揮すべき時ではないのでしょうか。小さな相談事から住まいづくり、保育や教育環境をよりよくする活動、市民のまちづくり運動、それらを包摂する国民のいのちと暮らしを守る運動の、あらゆる場面で私たち専門家の「人々の願う豊かな生活環境と高い文化を創造するための行動が求められています。

「住民主体のまちづくりはきれいだ」という声を聞いたことがあります。しかし「きれいだ」とを諦めた先になが待っているのか、昨今の状況はそれが容易に想像できるところまで来ています。諦めずに専門性を活かしてできる限り行動し、専門家として発信し続けなければなりません。

今年は第34回新建全国大会の年です。困難な状況はたくさんありますが、ひとりひとりが建築人としてなができるか、どう生きていくかを考え、それを新建運動につなげて拡げているような大会にしたいと思えます。